

わが国の教育荒廃の背後にあるもの

——「よりよい生活^{クラシ}」を求める「量的拡大の持つ様式」の
生き方と、「受験体制の教育」——

朝倉 哲夫

目 次

はじめに

(I) 「よりよい生活を求める「量的拡大の持つ様式」の生き方と、「精神的貧困化」の問題

(II) 「よりよい生活」を求める「量的拡大の持つ様式」の生き方と、「受験体制の教育」という

「教育荒廃」の問題

おわりに

はじめに

経済大国といわれるわが国において、最近しきりに「経済的豊かさの中における精神的な貧しさ」ということが指摘される。しかも、このようなアイロニクな状況の一端は、教育の世界においても、「教育の過熱、爆発の時代における教育の貧困」という極めて矛盾した現象を招来していたのである。それにつけても、経済的にはまことに豊かになり、モノが満ち溢れているわが国において、何故に「ニヒリズム」とか「エゴイズム」とかというような「精神的な貧しさ」を象徴する現象が横行し、また進学率が飛躍的に拡大しつつある教育の過熱の時代において、教育すればするほど却って「無気力症」や「怠学」などに陥り、また「非行問題」や「麻薬」などに走るといふ児童・生徒たちが増大しているのであろうか。このような「精神的な貧しさ」とか「教育荒廃」の現象は、一体何故に生じたことなのであるか。

もう数年前のことになるが、朝日新聞の朝刊（昭和六十三年十一月十二日）に、「フジ三太郎」の極めて面白い漫画が掲載されていた。漫画の筋は、あの三太郎が大学祭の講演会に出掛けていくのであるが、「人生いかに生きべきか」という講演会では彼がたった一人の聴衆であるのに対して、「人生いかに稼ぐか」という講演会では、会場に入りきれないほどの超満員の聴衆が溢れている、三太郎が会場に入れないというものである。この四コマの漫画は、現代日本のいかにも歪んだ世相、つまり、冒頭に指摘しておいたようなアイロニクな状況の原因をまことにするどく斬っていて、思わず苦笑させられた。というのも、現代のわが国が当面する「精神的な貧しさ」とか「教育の貧困」などという問題は、まさしく「人生いかに生きべきか」という問題が全く忘却されて、「人生いかに

に稼ぐか」ということだけが大きな関心の的となり、ただお金、お金というお金の支配する、また「モノ」、「モノ」という唯物論たはものろんの横行する情ない国になり下ってしまったことが、極めて大きな原因なのではないかと思われるからである。

かつてソクラテスは、アテナイの市民たちに向つて、次のような警告を発して止まなかつたといわれる。

「万人にすぐれた友よ、最も偉大であり、その智慧と国力において最も著名なアテナイの市民でありながら、できるだけ多く蓄財することや評判や名誉をうることにみに気を遣い、識見や真理を、また魂をできるだけよくするように気遣いもせず配慮もしないことを恥辱とは思わないか」と。（藤井義夫「哲学の誕生」一一頁）

このようなソクラテスの愚衆民主制下のアテナイの市民に対する警告は、まさしく今日の私たち日本人の生き方に対しても、なおかつ十分に当てはまることなのではないかと思われる。というのも、敗戦後、私たち日本人が連合国によつて与えられた御仕着せの民主主義の体制下において、終始一貫して努力してきたことは、経済復興、経済成長（高度経済成長）、経済大国という経済優先のその軌跡にも端的に窺えるように、ソクラテス流にいうならば、「できるだけ多く蓄財すること」のみに狂奔してきたといえるからであり、その半面、「魂をできるだけよくしようとする気遣いを殆んどしなかつた」ことが、今日のわが国におけるアイロニクな状況を招来した大きな原因であるといえるからである。私たち日本人が、「経済的動物イコノミック・アニマル」として、全世界から不信と軽蔑と羨望の眼差しでみられている所以であろう。日本人はもつと精神的・文化的国民とならなくてはならないのである。

このように、「フジ三太郎」の漫画やソクラテスの警告にも端的に指摘されていたように、戦後（第二次世界大戦後）における私たち日本人の生き方は、いわば「よりよい生活クラシク」、「より豊かな経済生活」の追求のみに目を奪われて、「よく生きる」とは何か」という人生の根本問題が等閑に附されてしまったことが、今日のわが国における「二

ヒリズム」や「エゴイズム」という「精神的な貧しさ」や、「受験体制の教育」という「教育の貧困化」、「教育の荒廃」を招来した根本の原因なのではないかと考えるのである。

それでは、この「よりよい生活^{クラシ}」を求め、「量的拡大の持つ様式」の生き方は、何故に、「ニヒリズム」とか「エゴイズム」という「精神的な貧しさ」を生み出し、また「受験体制の教育」という「教育の貧困化」を不可避的に招来せざるをえないのであろうか。こうした問題を、次節以下において、順次に考察していきたいと考える。

(I) 「よりよい生活^{クラシ}」を求め「量的拡大の持つ様式」の生き方と、
「精神的貧困化」の問題

ここで先ず初めに、私たちが注意しておかなくてはならないことは、この「よりよい生活」を求めて「量的拡大の持つ様式」の生き方をあくせくと生きる「主体^{もの}」は、端的にいつて「自分としての私」、つまり「分別的自我」、「我執的自我」、「欲望的自我」というような三つの性格をもつところの「エゴ存在」であるということなのである。しかも、このような「エゴ存在」が「ニヒリズム」や「エゴイズム」という「精神的な貧しさ」を生み出すと同時に、また「受験体制の教育」という「教育の貧困化」を招来するところの元凶なのでもあるということ、私たちは先ず心にしっかりと銘記しておかなくてはならないのである。それでは、この第一節においては、この「自分としての私」が何故に「量的拡大の持つ様式」の生き方を推進し、また「ニヒリズム」や「エゴイズム」という「精神的な貧しさ」を招来せざるをえないのか、という問題を「自分としての私」の三つの性格に即して順次に考察しておくでしょう。

① 初めに、「自分としての私」の最も大きな特徴は何かといえ、それはまさしく「分別的自我」に他ならぬといえるであろう。というのも「自分」という存在は、それを字義通りに解するなら、「自らを他から分ける」とにおいて成立するところのもの、つまり「主・客」を区別し、「自・他」を分別することにおいて成立するところのものであるといえるからである。それでは何故に、私たち人間においては、このような「分別的自我」としての「自分」という存在が成立せざるをえないのであろうか。端的にいって、それは私たち人間の生後における「自意識」の芽生えということが、その最も大きな原因であらうと思われる。

ところで、この「自意識」の芽生えという問題であるが、児童心理学的には、幼児期の三歳位の頃において、認められることであるという。たとえば、この年頃の幼児に対して「坊やは誰れ？」というような質問でもすると、「僕は僕だよ」というような「自分」という存在に対する認識を端的に示すような答えが直ちに返ってくるようになるといわれている。「自分としての私」の意識の芽生えが、この位の年頃にはつきりと認められる所以であらう。これに加えて、生誕以来、誰それという固有の氏名が与えられて、常にそれで呼び慣わされていることも、「誰某という自分」の存在をより明確に意識化させるものなのでもあろう。たとえば、日常、まことによく見かけることなのであるが、幼児が自分のことを指して「〇〇ちゃん」と呼ぶようなことも、その例証となるであらう。そうした点、次のような童謡（阪田寛夫作詞）は、幼児のこの「自意識」の芽生えをぴたりとついでいて、まことに面白いと思われる。

サツちゃんはね

サチコって いうんだ

ほんとはね

だけど ちっちゃいから

じぶんのこと

サツちゃんて よぶんだよ

おかしいな サツちゃん (傍点は筆者)

その他、生誕以来の家庭におけるしつけ、また多年にわたる学校教育、更には、社会におけるいろいろな諸経験などが媒介されることによつて、この「自意識」はますます強固に形成されて、やがて一人前の大人に育っていくのである。とするなら、私たち人間が「大人」になるということは、まさしく、こうした「自意識」が強固に形成されて、「生誕以来の自分」、換言すれば「生来の自分」が確立されるということに他ならないといえるであろう。こうしたことから、私たちは、このような「生来の自分」、つまり「分別的自我」を、いつの間にか最も大切な確実な存在であると思ひ込んで、この「生来の自分」を確立することが何か本当の人間としての生き方であるかのように錯覚してしまうものなのである。(「生来の自分」とは私たちが大人になるためのいわば「必要悪」でしかないのであつて、私たちが本当の人間となるためには「無我的自己」を確立することが大事なのである。)ところで、このような誤つたものの見方・考え方を最も大きく推進したのは近代であるといえるのであつて、近代はこうした「生来の自分」(分別的自我)を、いわゆる「近代的自我」(それは確かに、理性的自我であるが、しかし分別的自我であることには変わりない)にまで昇華して、それを極めて高く評価してきたのである。それに加えて、この「近代的自我」がその大きな推進力となつてきたところの科学・技術文明が、これまた、まことに華々しい成果を上げたこともあつて、この「近代的自我」に対する評価はいよいよ高まつたのである。しかし、この科学・技術文明が「自然の征服は善である」というような「近代的価値観」に立脚して、長年の間、自然破

壊や汚染を促進し、人類の生存の危機が、いまや最も深刻に取り沙汰されるようになった今日においては、（今回の湾岸戦争は、その最も象徴的なものであろう）それを推進したところの「近代的自我」についても、それが「分別的自我」としての「エゴ存在」に他ならなかったことが徹底的に反省されなくてはならないのである。とするとき、私たちは、この「分別的自我」を含めたところの「生来の自分」について、最も冷徹なものを見方をしていたものは仏教であったということを改めて想起しなくてはならないであろう。

仏教においては、この「生来の自分」は、端的に「縁起所成」によって生じたところのもの、つまり「縁り合つて生起」したものに他ならないとされる。たとえば、その十二因縁の原理によれば、それはまさしく次のような因縁によつて生起したところのものであるといわれるのである。（山田無文「白隠禪師坐禅和讃講話」一〇九頁）

無明——根本的な無知によつて

行——盲目的行動を起こし

識——個人が成立する。すなわち托胎

名識——母胎内の精神と肉体とが

六入——眼耳鼻口身と意を形成する

触——生後しだいに外界に触れて

受——外界のあらゆる力を受け入れ

愛——事物に愛着を覚え

取——それらを獲得する

生——そして所有感を持ち

有——生存の自覚に入る

老死——而してついに生の終末となる

このように、仏教においては、「生来の自分」（その中心は「分別的自我」である）とは、実に「無明」（仏教の三法印（諸行無常・諸法無我・涅槃寂静）の教え、特にそのうちの「諸法無我」という教えを知らない根本的無知のこと）に始まり、「老死」に終るところの「縁起所成」の身に他ならなかつたものなのである。

以上の十二因縁の問題は、これを現代風に言い換えてみるならば、端的に、次のように表現しうることであろう。すなわち「生来の自分」（分別的自我）とは、両親からもらった遺伝的性格、生れた時の境遇、時代、環境、受けた教育、習った風習、してきた習慣、生きてきた諸々の経験等々という、すべてこうした偶然的なもの「より集まり加減」でしかないものを、「自分は自分だよ」とする分別的な「自意識」によって統括したところのものに他ならないのである。それでは何故に、私たちはこのような偶然的なもの「より集まり加減」でしかない「生来の自分」（分別的自我）を、いつとはなしに、また何らの理由もなしに、確固とした「自分」というものがあるかのように錯覚して、それに「自分」というレッテルを貼って思い固めてしまうものなのであろうか。それは確かに、「自意識」によるものであるとしても、この「自意識」を生み出し、また「自分」に執着するところの「我執的自我」を成立させるものとは、一体何なのであろうか。

⑥ 端的にいつて、この「我執的自我」を成立させるものは、唯識仏教によれば、その八識説の中の第七識、つまり無意識層における「末那識」がその根本の原因なのであるというのである。それでは、ここで、この唯識仏教の八識説について少しく考えておくことにしよう。唯識仏教の八識説とは、図式化すれば、次のようなものである。

識 識 識 識 識

(八識)

- ①眼
- ②耳
- ③鼻
- ④舌
- ⑤身
- ⑥意

表層意識

- ⑦未那識
- ⑧阿頼耶識

深層意識

さて唯識仏教の最も大きな功績は、それ以前の仏教が表層意識の①から⑥までの「識」しか知らなかったのに
 対して、唯識仏教は、深層意識である⑦の「未那識」と、⑧の「阿頼耶識」とを発見したことにあるであろう。
 その場合、それでは⑧の「阿頼耶識」とは一体どのようなものかといえ、それは別名を「蔵識」ともいわれる
 ように、私たちが母親の胎内に托胎したときからの諸々の体験や、また生誕以後において経験してきたところの
 一切の諸経験が蔵されているところの「識」をいうのであり、しかも、それは激しく「暴流」していて決して「固
 定化」することのできないものなのでもある。にも拘らず、私たちはこうした諸経験の「暴流」して止まないも
 のを、知らず識らずの裡に「固定化」してそれに「自分」というレッテルを貼りつけて、それをいつしか確固不
 動のものとして思い込んでしまうものなのであるが、そうしたことを推進させるものは実に⑦の「未那識」の仕
 業に他ならないというのである。というのも、この「未耶識」とは、いつもいつも無意識の裡に、「自分としての
 私」のことだけを思い続けているところの「識」のことをいうのであったから、激しく「暴流」して止まない「阿
 頼耶識」を、知らず知らずの裡に、「自分としての私」であると錯覚して、それを「固定化」するという働きをす
 るからである。それが、仏教でいうところの「無明」に他ならないのである。というのも、仏教においての最も
 根本的な教えは、「諸法無我」（森羅万象には、固定した「自分」というものは存在しないという教え）というこ

となのであったが、この教えを全く知らないという根本の無知が「無明」ということであったからに他ならない。しかも、そこから「自分としての私」を固定化するという「愚痴」が、つまり「迷い」が生じてこざるをえなかったのである。とするなら、こうした「自分としての私」（生来の自分）を固定化することにおいて成立するところの「我執的自我」とは、まさしく「迷妄」以外の何ものでもないといえるであろう。とはいえ、ひとたび、このような「生来の自分」が「我執的自我」として思い固められてしまう段になると、そこから「欲望的自我」が、不可避に、生じてこざるをえなかったのである。

◎ それでは何故に、この「欲望的自我」が生じてこざるをえないのかといえば、それは「自分としての私」がひとたび思い固められて、「固定化」される段になると、私たちは必然的に、この「自分」という存在を少しでもより安泰にし、また強固に確保しようとするために、「自分」が生存するための必要以上に、より多くのものを所有して「自分」という存在を可能な限り有利ならしめようとするからである。具体的にいえば、より多くの財産とか、社会的地位とか、名誉とか、知識とかを所有して「立身出世」をしようとするからである。というのも、「立身出世」をしようとするのが「よりよい自分の生活」を実現すると同時に、また「自分」という存在をより強固に確保するための唯一確実の方法であったからに他ならない。「量的拡大の持つ様式」の生き方が、どうしても支配的なこととならざるをえなかった所以なのである。

以上においてみてきたように、「よりよい生活」を求めて「量的拡大の持つ様式」の生き方をあくせくと生きる「主体」は、実に「分別的自我」、「我執的自我」、「欲望的自我」というような三つの性格をもったところの「自分としての私」に他ならなかったのである。

それでは次に、この「自分としての私」が大きく推進するところの「量的拡大の持つ様式」の生き方は、何故

に「ニヒリズム」とか「エゴイズム」という「精神的な貧しき」を招来せずにはおかないのか、という問題を考へておくことにしよう。

すでに指摘しておいたように、「自分」という存在が、「自らを他から分ける」ことにおいて成立するところのもの」であるとするならば、その場合、「自らを他から分ける」という「他」とは一体何を意味することなのであるか。こうした問題が先ず問われなくてはならないであろう。端的にいつて、それには人間存在の構造からみて、二つのものがあるのではないかと思われる。その二つのものとは、私たち人間を人間たらしめるための必要欠くべからざるものなのであるが、その一つは、垂直面における「私たち人間の力を超えたところの大いなるもの」であり、いま一つは水平面における「他者」であるといえるであろう。というのも私たち人間は、この垂直面と水平面という、こうした二つの関係面における「間柄」を自他不二的なかかわりににおいて、自他一如的に生きるとき、私たちは初めて「本来の人間」（それは「生来の自分」においてみられるような分別的生き方ではない）としてのあり方・生き方が可能になる筈であったからである。とするなら、ここで何よりも先ず問題とされなくてはならないことは、「自分としての私」が自らを垂直的關係面における「人間の力を超えたところの大いなるもの」との間柄や、また水平的關係面における「他者」との間柄などから分けるとき、そこからはどのような問題が生じてくるかということであろう。端的にいつて、前者からは「ニヒリズム」とそれに伴なうところの「快樂主義」が、また後者からは、「エゴイズム」という極めて深刻な二つの問題が結果するであろうと思われる。それでは初めに、「ニヒリズム」という問題と、それに伴なうところの「快樂主義」が、何故に結果せざるをえないかという問題から考へていくとしよう。

人間という存在は、まさしく字義通りに、「間柄」の中に生かされてあるものとして、その垂直的關係面におい

ては「人間の力を超えたところの大きいなるもの」の働いきによって、「生かされて生きてあるところの存在」であるといえるであろう。それにも拘らず、この「大きいなるもの」との間柄から自らを分けるときには、私たちは、この「生かされてある」という人間存在の「絶対の受動性」を忘却することによって、不可避免的に、傲慢やひとりよがりに陥らざるをえないのである。そこから、「自分ひとりの力」でも十分に生きていけるといふ錯覚（迷い）にとらわれて、真の人間としての生き方や、「生きる究極の目標」などを見失わざるをえなくなるのである。「ニヒリズム」（虚無主義）という問題が、招来されざるをえない所以であろう。

かつてニーチェは、「神は死んだ」と語って、いわゆる「超人」としての「強者のニヒリズム」の生き方を男らしい生き方として、こうした生き方を積極的に主張したのであるが、しかし彼自身は最後には発狂死したという事実が如実に物語っていたように、私たち人間はこの「ニヒリズム」を超人的に耐えて生きるということは到底できないのである。そこで私たちはどうするかといえ、この「ニヒリズム」から目をそらすために、より多くのお金カネやモノや知識や名誉や権力などを所有することによつて、「よりよい生活クラシ」を達成しようとする人生の「虚偽的目標」を設定して、「自分としての私」をより強固に、より安泰ならしめようとするのである。しかし、こうした「虚偽的目標」を追求する空しい努力は、却つて私たちを、更に一段と増大する空虚さの中につき落さざるをえないのである。今日、私たちの国を広く覆っている「経済的な豊かさの中における精神的な貧しさ」というアイロニクな現象は、一言にしていえば、「衣食足つて、空しさを知る」ということに他ならないのであり、また「教育の過熱、爆発の時代における教育の貧困化」という問題も、いわば「受験教育過熱して、若者アパシーに陥る」ということを意味するのであり、それらはいずれも「ニヒリズム」といふ精神の砂漠化現象以外の何ものでもないといえるであろう。

ところで、このような精神の砂漠化状態は、それを最も安直にしかも手取り早く回復しようとするならば、「快楽」や「娯楽」などに身を任かせて、たとえ、一時的にせよ、精神の空虚さをまぎらすのが一番効果的なことであろう。それ故に、「ニヒリズム」は不可避免的に「快楽主義」や「刹那主義」を伴わざるをえなかったのである。とするなら、「ニヒリズム」と「快楽主義」とは、まさしく、表裏一体の関係にあるものといえるのであつて、今日、わが国を広く覆っている、いわゆるエロ・グロ・ナンセンスの流行や、グルメ・ブーム、麻薬の横行、セックス情報の氾濫などは、端的にいつて、現代の日本がいかに「ニヒリズム」によつて毒されているかということ、逆に立証するものであろう。

このように、私たちは意識しようとしまいと、私たちを根底から支え、私たちを真に生かしていてくれるところの、「人間の力を超えた大いなるもの」から、自らを分けるとき、「自分としての私」は不可避免的に「ニヒリズム」に陥らざるをえないと同時に、またそれに伴なうところの「快楽主義」の虜とならざるをえないということ、私たちは心にしっかりと銘記しておかなくてはなるまいと考えるのである。

それでは次に、この「ニヒリズム」と共に、私たちが水平的関係面における「他者との間柄」から自らを分けるとき、私たちは不可避免的に「自分中心主義」という「エゴイズム」の生き方に陥らざるをえないという問題を考へておくとしよう。というのも「エゴイズム」とは、次にみるような四つの生き方・あり方をするこゝを端的に意味していたからである。

① 自らを、垂直的関係面における「人間の力を超えた大いなるもの」との間柄から分ける。そこから、「生きる方向性」や「生きる目標」の喪失などという問題が生じる。それが「ニヒリズム」に他ならないことは、すでに指摘しておいた如くである。とするなら、「自らを他から分ける」という「自分中心的」な働きをするこゝの

「エゴイズム」とは、まさしく「ニヒリズム」を招来するところの元凶なのであるといえるであろう。「ニヒリズム」の根底には「エゴイズム」の衝動が伏在していたことなのである。

② 自らを、水平的関係面における「他者」との間柄から分ける。そこから、「間柄的關係性の喪失」という問題が生じる。そこに「自分としての私」が取り出され、いわゆる「エゴイズム」が成立する。

③ 「生きる方向性の喪失」と、並びに「間柄的關係性の欠如」という地盤の上に立って、この「自分としての私」を中心に「我儘一杯」、「氣儘一杯」に生きていこうとする。

④ この「自分としての私」を、より安泰により強固に確保しようとするために、より多くのもの（お金や名誉や権力など）を所有しようとするところの「持つ様式の生き方」が推進される。

このように、「エゴイズム」とは、「生きる方向性」や「生きる目標の喪失」などという、あの「ニヒリズム」を招来するところの元凶であったと同時に、また「他者」との「間柄的關係性」を破壊させるところの悪の根源力なのでもあるということ、私たちは心にしっかりと銘記しておかなくてはならないのである。それでは、この「間柄的關係性の破壊」という問題に関連して、次に「自分としての私」がどのようなエゴイステイックな生き方をするものなのかということ、その三つの様相に即してみておきたいと考える。

① 「自分としての私」は、何よりも先ず、「自分」という存在をより安泰にかつ強固に確保したいと熱望するために、「自分」が生存していくための必要以上に、土地や財産や名誉や権力などをより多く所有しようと妄執するであろう。その場合、一切が商品化されているところのわが国のような資本主義の社会においては、何よりもすぐれて金銭が有用であるために、金銭に対する所有欲は恐らく盲目的となるのではないかと思われる。そしてまた、多ければ多いほどよいとする「more」の心根は、必ずや貧りとしての所有欲を無限ならしめるのではない

かと憂うるのである。現代のわが国に横溢するところの「お金」、「お金」という「お金万能主義」や、また「モノ」、「モノ」という唯物論の横行する情ない風潮は、端的にこうしたことを証明するものである。

② 次に、この「自分としての私」は、「間柄的關係性」という人間本来のあり方を破壊してまでも、「自分」を中心とする生き方を実現しようとい図することであろう。そこから、他者を支配すると同時に、また思いのままに動かすことのできる力、つまり「権力」をできるだけ多く所有したいと熱望するものなのでもある。そして、できうるならば最高の権力を得たいと希求するであろうと思われる。何故なら、この「自分としての私」にとつては、強い権力を持つということが、また「自分」という存在を確保するための最も確実な方法でもあったからである。とするなら、この「自分としての私」の最終の目標は、「自分」を「神」として他者を支配し、他者をして「自分」を礼拝させることに尽きるであろうと思われる。そうとすれば、歴史に登場したところのいわゆる英雄といわれる人物たちは、多かれ少なかれ、このような典型であったといえることではなからうか。ともあれ、この二十世紀においても、私たちは実にヒットラー、スターリン、フセインなどという最悪最凶のエゴイストの名前を挙げるのできるのである。

とはいえ、この「自分としての私」は通常はそこまで強くなれないので、そこで「通常のエゴイスト」として、強大な権力者とか組織とか集団などに所属して、その陰で少しでも多くのおこぼれに与ろうとするのである。そこから、現代のわが国においては、一流の企業や組織や集団などに所属して出世をし、「自分」という存在をもあれ安泰に確保しようとするところの生き方が横溢していたことなのである。しかも、こうした生き方が、教育の世界に反映するとき、そこには「受験体制の教育」という誤った教育が横行せざるをえないということ、私たちは心にしつかりと銘記しておかなくてはならないのである。

③ 更にまた、この「自分としての私」は特にすぐれて「自分」という存在に対する愛着の極めて強い「自惚れ屋」でもあるところから、「自分」の美しい容姿や、すぐれた能力や業績などを、他者から賞讃されることを何よりも欲するものなのである。すなわち、名声とか名誉とかによつて美しく装われたところの「自分」の姿をみたいと渴望するものなのである。というのも、「自分」に対する限りない愛着としての「自惚れ」とは、まさしく文字通りに、「自分」が「自分」に惚れるということの意味していたからに他ならない。つまり「自惚れ」においては、「惚れる自分」と「惚れられる自分」とが同一の対象であるという点に、大きな特色があると同時に、また「惚れられる自分」が名声とか名誉とかによつて美しく装われているとするならば、それだけに一層惚れ甲斐があるというものである。とするなら、この「自分としての私」は、まさしく他者による賞讃の声を耳にしなから、「自分自身」に酔うというところの「自分陶醉者」のことに他ならないといえるであろう。

現代のわが国において、戦後しばらくは鳴りをひそめていたところのあの「立身出世主義」が、またぞろ大手を振つて横行している所以なのである。というのも、最も美しく装われたところの最も魅力のある「自分の姿」をみたいと思ふならば、「立身出世」をすることが最も効果的であるといえるからである。しかも、この「立身出世主義」が横行するところ、教育のあり方も不可避的に「受験体制の教育」とならざるをえないということをし、私たちは忘却してはならないのである。というのも、現代のわが国においては、「立身出世」をしたいと願望するならば、一流大学を卒業して、一流の企業や組織や集団などに就職することが一番確実な方法であつたからである。

このように、「自分としての私」の生き方においては、以上において指摘しておいたような三つの様相におけるあり方が、つまり「お金と権力と名誉」を希求するというあり方が、不可避的につきまとうことであつたのである。

うと考えるのである。それ故に、この「自分としての私」を基盤として「よりよい生活」のあり方が求められ、「量的拡大の持つ様式」の生き方が大きく推進されつつあるところの現代のわが国においては、すべてのことにつけて、「私の利益」や「私の権力」や「私の名声」などが第一に考えられるところの「我利我利亡者」としてのエゴイストの生き方が、換言すれば、「割に合わないことはすまない」、「損になるようなことはすまない」とする損得勘定の生き方や、権力志向の生き方や、売名的な行為などが、何事につけても如実に現われてこざるをえなかったのである。（たとえば、リクルート事件に関係したところの総理大臣や、文部省の次官のいたことなどを考えてみよ。）したがって、現代のわが国においては、古来、道徳的には極めて高く評価されてきたところの「無償の行為」ということや、「自己献身」などということが全くナンセンスなこととして少しも顧みられなくなってしまうていたのである。こうしたことが、わが国の道徳を頹廃させ、道徳教育を沈滞させているところの大きな原因であるということも、私たちは決して忘れてはならないのである。

それでは、この節の最後に当って、「自分としての私」はそれを論理化して表現するとすれば、どのような論理として提示しうるかという問題を考えておきたい。それは、端的に言って、次のような論理として定式化しうることなのではないか、と考えるのである。

「私が私であるのは、つまり私が私であるからである。」

とするなら、このような論理は、あの形式論理の同一律、すなわち「AはAである」という「同一律」に通じるものがあるといえるであろう。つまり、「自分としての私」とは「同一律的自己」のことに他ならないといえるのであり、そこには「自分」という存在を超越しうるような契機エレメントが全く含まれていないということに、私たちは特に注意しておかなくてはなるまいと考えるのである。

それかあらぬか、至道無難は、このような「自分」という存在を更に「生き畜生」とまで罵倒していたのであった。

我ありて見聞覚知する人を 生き畜生とこれをいうなり

ともあれ、このような「同一律的自分としての私」が、「よりよい生活」を求めて「量的拡大の持つ様式」の生き方をするところ、そこには「ニヒリズム」とか「エゴイズム」とかというような「精神的な貧しさ」が招来されざるをえないと同時に、それはまた教育の次元においては、「受験体制の教育」というような「誤った教育」を横行させることにより、「教育の貧困化」という問題を醸成せざるをえないということを、私たちは決して忘れてはならないのである。それでは、次節において、この「よりよい生活」を求める生き方が何故に「受験体制の教育」という「誤った教育」を招来せざるをえないのか、という問題を改めて考えてみることにしよう。

(II) 「よりよい生活」を求める「量的拡大の持つ様式」の生き方と、

「受験体制の教育」という「教育荒廃」の問題

今日のわが国において、「よりよい生活」を実現し、「自分としての私」の存在を可能な限り安泰に、より強固に確保しようとするならば、何はともあれ「名門大学」を卒業して、「一流の企業や組織」などに就職し、立身出世をして「量的拡大の持つ様式」の生き方を実現することが、最も手取り早い確実な方法であるといえるであろう。そこから、戦後におけるわが国の教育は、その経済大国への歩みと共に、「量的拡大の持つ様式」の生き方を

促進するための手段として、換言するなら「立身出世」をするための早道として、よりよい名門学校へと進学するための「受験体制の教育」とならざるをえなかったのである。「教育基本法」の第一条には、教育の目的は「人格の完成」にあるということがはつきりと明記されているにも拘らず、「人間性の実現」を願う教育本来のあり方が、「受験体制の教育」へと大きく墮落せざるをえなかった所以である。

最近、「出世音頭だよ！」(大津あきら作詞・浜圭介作曲)という演歌調のこんな歌が、NHKのテレビやラジオで流されている。有線放送でも毎晩のように流されているとのことである。(平成三年三月現在)

耐えてしのんだ

私の瞼に

虹を架けます 名門学校

ジョッパリ ノーエで サのサイサイ

世間の雲が晴れるまで

私 運命の子供と呼ばれたい

死ぬも生きるも 試験ひとすじ

幸せほろり

これが常識 出世音頭だよ

雨にめげずに

嵐に負けずに

涙濡れます ああ塾通い

ハチキン ノーエで サのサイサイ
手拍子鳴らし 蔭日向

にくいテストに 命を捧げたい
泣くも笑うも いついつまでも

溜息ほろり

これが常識 出世音頭だよ

春にしおれる

花もあるけど

夢を咲かそう 落ちこぼれても

ケツパレ ノーエで サのサイサイ

未練の色はとこしえに

私 運命の子供と呼ばれたい

ここには、何か現代のわが国における「受験体制教育」の極めて大きな歪みを、「これが常識」として全面的に肯定し、立身出世のためには止むを得ないというような調子のあることは全く頂けない。しかし、それにつけてもNHKともあろう公共の放送機関が、こんな愚劣な内容の歌を堂々と流して、「立身出世」の風潮を煽るとは、あきれ果ててもものもいえない。それとも、これは「受験体制の教育」に対する大いなる警鐘のためなのでもあるうか。

もうかなり以前から、「東大入学は三歳から」というようなことがいわれ、このような言葉に惑わされた世間の親たちは、子供たちには自分たちよりも何んとかして「よりよい生活^{クラシ}」をさせてやりたいと願う切ない親心から、

子供たちを逆に「出世音頭だよ！」という歌にみられるような、まことにすさまじい「受験地獄」へと馳り立てていたのである。こうしたことが、受験産業をしてわが世の春を謳歌させる一方、また他方では子供たちを「無気力症」や「怠学」などに追いやると同時に、更には「非行」や「麻薬」などにも走らせるところの極めて大きな原因ともなっているということを、私たちは決して忘れてはならないのである。

もうすでに二十年以上も昔のことになるが、私がまだ道徳教育担当の指導主事として横浜市教育委員会に勤務していた頃、朝日新聞の声欄に一受験生（匿名希望）の詩とも散文ともつかない次のような投稿が掲載されていた。（昭和四十四年二月三日朝刊）それは、教育荒廃の原因の一端を、一受験生なりにあまりにも見事についたものであったのでいまだに記憶に残っている。

今オレの一番やりたいこと

笑わないでほしい、オレは電車に乗りたい

もう何か月も、この部屋の、この机の前に坐っている

オレは浪人

オレは勉強をしたくないわけではないし、今のオレを「灰色の青春」などとも考えない
だけど、あまりにも方法が悪すぎる

夜中にインスタント・ラーメンばかり食う

試験科目以外には、本も読めない

この「教育」の中から、何が生まれようか

大人たちへの不信感以外に、何が生まれようか！

数学や英語が「教育」の目的なのか！

「手段」と「目的」を入れちがえているのではないか！

オレは電車に乗りたいたい

一日中、人ごみの中で動き回りたい

多くの人と話がしたい

当時は大学紛争の問題が世間の注目をあびていた頃のことであり、恐らくは在宅の浪人であったのであろう。あれ以来、すでに二十年以上の歳月が経過しているのであるが、それでは「受験体制の教育」のあり方が少しは改善されたのかといえ、そんなことは決してない。むしろ、「大学卒」という一片の卒業証書を求めて競争する「受験体制の教育」のあり方は、ますます激烈となり、そのための狂った教育は遂に「英語」や「数学」などを「教育の目的」とすることによって、わが国の教育のあり方は、まさしく教育本来の「目的」と「手段」とを完全に「入れちがえている」といえるのである。そこから、現代のわが国においては、「学力偏差値」がこの上もなく重視されざるをえないと同時に、また、この「偏差値」による進路の振分け指導があたかも教育そのものでもあるかのような考え方が、暗黙の裡に、広く教育界を覆っているのである。教育が荒廃せざるをえないのも決して無理ではないのである。しかし、教育界におけるこうした「偏差値」重視の問題は、少しく考えてみれば、私たちが日常「よりよい生活」^{クラシ}を求めて、「上流か、中流か、下流か」というような競争意識の中で限りなく「上流」に近づきたいと踴っている、その生き方の反映なのでもあるといえることなのではなからうか。というのも「偏差値」とは、「一定の標準となる数値から、どの程度ずれているかということを示す数値」として、標準（いわば日常生活における中流）となる数値から少しでも上位の方向にずれているということが、生活面においては「生活水準」が高いとして、また教育面においては「学力水準」が高いとして評価されるということに他ならないか

らである。このように、人間が「生活水準」や「学力水準」の高低のみによって評価されざるをえないところにおいては、教育のあり方はどうしても「名門学校」に入学するためのそれとして、「受験体制の教育」という「知識偏重」の、「知識注入」のための教育とならざるをえなかったのである。教育が「狂った教育」として、廃頽せざるをえないのも無理のないことであろう。それかあらぬか、過日（平成三年三月十五日）、そうしたことを端的に示すかのような大事件が、つまり入試答案の改ざんという大椿事が兵庫県立農業高校の入試に際して起り、しかもそれを命じたのが校長であるという、前代未聞の大不祥事が生じたことは、まさに「受験体制教育」の大いなる歪みの極致を端的に示すものといえるであろう。まことに断腸の思いで一杯である。それではここで、この「受験体制の教育」は一体どのような問題を孕んでいるのか、という問題を改めて考えておくとしよう。そこには端的にいつて、次のような二つの大きな問題があるのではないかと思われる。その一つは、「受験体制の教育」と「ニヒリズム」という問題であり、いま一つは、「受験体制の教育」と「エゴイズム」という問題である。それでは、前者の問題から順次に考えていくとしよう。

① 「受験体制の教育」と「ニヒリズム」の問題

「受験体制教育」の一番の癌は、何んといっても「ニヒリズム」（虚無主義）の生き方を醸成せざるをえないということであろう。というのも、「受験体制の教育」の中にあつては入学試験の科目は「主要科目」として最重要視されざるをえないのであるが、これに反して、入試科目以外の科目は入試に全く関係がないところから、不可避的に軽視されざるをえないという問題を宿命的に宿しているからである。そこから、入試に必須であるところの「英語」や、それに準ずる「数学」などが何か教育の「目的」でもあるかのように錯覚されざるをえないと同時に、また教育本来の「人間形成」に最も深くかかわるところの道德教育が何か全く余分なものとして軽視され

ざるをえないという、「目的」と「手段」との転倒現象が必然的に生じてこざるをえないのである。ところで高校の三年間は、考えてみれば、人間形成の上において最も大切な時期であり、「人生いかに生きるべきか」という問題が最も広く深く考えられなければならないときであろう。ソクラテス流にいうならば、「魂をよりよくするため気遣い」をするために、哲学書や宗教書などが最も多く熟読されなければならないときである。それが入試科目に関するところの教科書や参考書以外は全く読めないというのであるから、「魂をよりよくするための気遣い」そのものが完全に欠落せざるをえないのである。

ヴィクター・フランクル (Viktor Frankl) という精神分析学者は、人間の基本的な欲求を、①快楽への欲求、②権力への欲求、③生きることへの意味充足の欲求という三つの欲求に分け、これら三つの欲求の中で最も大切なのは、③の「生きることへの意味充足の欲求」であると指摘していたが、とするなら「受験体制の教育」はこの「生きることへの意味充足の欲求」を全く充足させることのない教育であるといえるであろう。ともあれ、この教育の中においては、「人生いかに生きるべきか」という人生の最大の課題である「生きることへの意味充足」の問題には全く目が向けられないのであって、ただ「名門学校」に合格するための受験勉強に精根を使い果たさざるをえないということは、そのこと自体がすでに「ニヒリズム」の生き方以外の何ものでもないといえることなのである。それかあらぬか、首尾よく「名門学校」に合格した段階において「早くも生き甲斐」を喪失して「アパシー」(無気力症)に陥る若者が極めて多いと指摘されているのである。「アパシー」といえば、もうかなり以前から、現代若者の「三無主義」(無関心、無感動、無責任)ということが指摘されていたが、それがいつしか「四無主義」となり、更には「五無主義」へと数が増大してゆき、現在では何んと「十三無主義」というようなことが、現代の若者の「アパシー」に関連していわれているのである。今後、現代の若者と「アパシー」の

問題は、「受験体制の教育」が継続する限りますます深刻化することなのではないかと思われる。

また、次に考えておかなくてはならないことは、この「受験体制の教育」においては、「不本意入学者」の数が極めて多いということなのである。それは、すでに中学校や高等学校などの入学に際しても数多く見られるところの現象なのであったが、大学への進学に際してはこれが更に一段と増幅されていくのである。というのもわが国においては、国・公・私立大学を含めて、その「主要大学」の序列化が東大を頂点としてほぼ形成されていたことなので、たとえばどこかの大学に合格したとしても、東大以外の各大学においては「不本意入学者」の数がかなり多いのではないかと想像されるからである。したがって大学に合格した段階において、（本当ならば希望に満ち溢れていなくてはならない時期において）早くもやる気を失って「無気力症」に陥るといふ学生の数も決して少くはないのである。こうしたことも、わが国の教育面における「ニヒリズム」の風潮を更に一段と助長するものであるということも、私たちは決して忘れてはなるまいと考えるのである。それでは次に、受験体制教育の後者の問題である「受験体制の教育」と「エゴイズム」という問題をみておくことにしよう。

② 「受験体制の教育」と「エゴイズム」の問題

「受験体制教育」の二番目の癌は、何んといつても「エゴイズム」の生き方を強く醸成せざるをえないということであろう。というのも「受験体制の教育」においては、「よりよい名門学校」に合格することが唯一最高の目的でもあるので、そのためには相手を蹴落してでも自分が合格することが至上命令であったからである。そこから極めて熾烈な競争意識が煽られざるをえなかったのであるが、しかし、こうした激しい競争意識は「他者と共に生きる」という生き方を徹底的に破壊するものでもあったからである。「エゴイズム」の意識が強固に醸成されざるをえない所以であろう。

君が十時にねむるなら おれは夜明けの二時にねる

人の倍やる五倍やる これで勝負は五分と五分

これは、ある中学生が書いた作文の一節であるが、ここにはいかにも物凄い競争意識がむき出しに表現されているであろう。これでは、級友のすべてが競争相手として敵視されざるをえないのも止むをえないことであろう。ともあれ、このような激烈な競争意識は「他者」との間柄を徹底的に破壊せずにはおかないものなのであり、そこに「自分としての私」の意識と生き方が、不可避免的に醸成されざるをえなかったものなのである。

ところでまた、このような「受験競争」という外部からの強制による無理遣いな外圧的勉強は、内心からの学習意欲に基づくところの自発的な学習では決してありえないので、大学合格という最終関門を突破した段階において、学習がすべて放棄されてしまうということにもなりかねないのである。大学がレジャーランドと化し、大学が遊民たちで満ち溢れているという、このアイロニクな現実が、端的にこのことを物語っているであろう。

このように、「入学試験」という名の受験戦争は、「自分」の生き残りをかけたそれとして「エゴイズム」の醸成に極めて大きなかわりがあったといえることなのであり、また「受験勉強」とは、まさしく文字通りに、外圧による強制されたところの勉強であったので、内面からの自発的な学習意欲を完全に抑圧するものであるということ、私たちは決して忘れてはならないのである。

それでは次に、この「受験体制の教育」はその性質上、単なる「知識注入、知識伝達」の教育とならざるをえないところから、不可避免的に「エゴイズム」を助長せざるをえないという、「知識偏重」の教育に内在するところの宿命的な問題を考えておくとしよう。

先ず、「知識注入、知識伝達」の教育ということに関していえば、それは「SはPなり」という「知識内容」が教師から生徒たちに伝達されることであるといえるであろう。その場合、特に注意しておかなくてはならないことは、この「SはPなり」ということがいわれるためには次のような二つの大きな問題があるということなのである。その一つの問題は、先ず特定の対象「S」が定立される必要がある、そのためには、それがもともと置かれていたところの元の諸関係から分けて取り出され、それが「非Sではないもの」として固定化される必要があるということなのである。そうでなければ、特定の対象「S」は他のものとの関係次第において、絶えず流動して止まないからである。とするなら、特定の対象「S」を「非Sではないもの」として固定化するということは、換言するなら、特定の対象「S」と他との関係性を一切拒否するということ、つまり「特定の対象S」をいわば「自分」という形で取り出し、定立するということに他ならないといえるであろう。そこに私たちは、「知識注入、知識伝達」ということにおける「エゴイズム」とのかかわりの問題を先ず注目しないわけにはいかないのである。いま一つの問題は、「SはPなり」という形式において「S」の「自分同一性」（通常は「自己同一性」といわれる）としての本質「P」が、客観的・普遍的な内容として伝達されなければならないという場合、そこで最も重要な働きをするものは「伝達の言葉」であるということなのである。ところで「伝達の言葉」なのであるが、それは端的にいつて、知識や情報や意志内容などを相手に対して正しく、正確に伝達するための言葉であるといえるであろう。しかもそれは、これらの内容を相手に対して矛盾することなく間違えなく伝えなくてはならないという大切な役目を負うところから、必然的に形式論理の諸法則に立脚しなければならぬものである。つまり、「同一律」や「矛盾律」や「排中律」などにである。しかし、この形式論理の「同一律」や「矛盾律」などに立脚せざるをえないということが、それらの思考性質からみて不可避免的に「エゴイズム」の助長につながるをえないこと

ろの宿命的な問題を伏在させているのではないかと憂うのである。何故であろうか。

① 「SはPなり」という知識内容の、「S」の自分同一性（自己同一性）としての本質「P」が、伝達の言葉を媒介として、教師から生徒たちに伝達されなくてはならないという場合、換言するならば、本質「P」が例えば「AはAである」というような形式論理の「同一律」に立脚して伝達されなくてはならないということは、それを人間形成という観点から改めて反省してみると、それはまた第一節においてもすでに指摘しておいたように、「私」が私であるのは、私が私であるからである」という、簡単にいえば「私は私だ」という「自分としての私」の意識をも、その思考枠として並行的に強固に形成する当のものではなかったかと反省するからである。

② また、本質「P」が「Aは非Aではない」という「矛盾律」に立脚して伝達されざるをえないということは、それはまた並行的に「私は他者ではない、或いは他者は私でない」という「自分としての私」の立場をも、その思考枠として強固に形成する当のものではなかったかと反省するからである。

このように、単なる「知識注入、知識伝達」の教育においては、知識内容「P」が伝達されるに際して、それと並行して「自分としての私」の意識や立場の形成ということが、間接的であるにせよ、促進されざるをえないということ、したがってこのことは、「エゴイズム」の助長につながらざるをえないということ、私たちが心にしつかりと銘記しておかなくてはなるまいと考えるのである。ともあれ、「受験体制の教育」は「ニヒリズム」とか「エゴイズム」という人間悪としての生き方をこの上なく推進せざるをえないところの教育であるということ、私たちは決して忘却してはならないのである。

おわりに

以上においてみてきたように、私たちが戦後「よりよい生活」^{クラシ}を求めてただただ「量的拡大の持つ様式」の生き方を押し進めてきたことは、不可避的に「出世主義」の社会的風潮を招来せずにはおかなかつたものなのであり、そうしたことはまた教育の面においては、「出世主義」と「名門学校」との結びつきを強化するところの「受験体制の教育」を大きく促進せざるをえなかつたのである。そして、「量的拡大の持つ様式」の生き方が「ニヒリズム」や「エゴイズム」という人間悪の生き方を醸成せざるをえなかつたように、この「受験体制の教育」もまた、教育本来の「人格の完成」を目的とするというあり方から大きく逸脱して、単なる「知識注入、知識伝達」のための教育となり下つていたのである。しかも、この「知識注入、知識伝達」の教育は「ニヒリズム」や「エゴイズム」の生き方と極めて深くかかわっていたことなのでもある。それは、まさしく「知育」に内在するところの宿命的な問題といえるのであり、「知育」は「痴育」になりかねないということを強く反省しておかなくてはならないのである。それ故にこそ昔から、「知育」、「德育」、「体育」という三つの教育のあり方が、人間形成にとっては必要不可欠なことであり、強調されてきたのであった。ともあれ、「知育」に対しては「德育」の必要性が徹底的に主張されなくてはならないのであり、現今のわが国の教育にとって最も必要であるのは道徳教育であるといえるのである。というのも、「経済的な豊かさの中における精神的な貧しさ」というような「アイロニクな状況」が支配するところのわが国においては、何よりも「精神的な豊かさ」を取り戻すということが緊急不可欠な最重要事であつたからである。そのためには、私たちは「精神的な貧しさ」を端的に象徴するところの「ニヒリ

ズム」や「エゴイズム」という生き方を克服することが強く要請されていたのである。「私が私であるのは、私が私であるからである」という「自分としての私」の主張に対して、「私が私であるのは、私が私でないからである」、換言するなら、「自分のないときすべては自己である」という「無我的自己」の自覚を迫ることが、現代の日本においては最も大切なことであつたからである。それが「精神的な豊かさ」を新しく築くという大きな問題に直接的につながっていたからであり、そのためには道徳教育の必要性と重要性とが改めて再認識されなくてはならないのである。ともあれ、わが国における教育の再建は、いつにかかつて、この「無我的自己」を育成するための、新しい教育の実現にあるといえるであろう。この重大な問題については、他日、稿を改めて論究したいと考える。

(平成三年五月三日脱稿)

付記

この論文の脱稿後、明治大学において替え玉受験、入学の問題が発覚した。受験体制教育の荒廃はいよいよ急である。